



第二次世界大戦中の女子学徒の工場労働の経験と戦後の職業指向への影響 : 三つの事例から

曾我, 邦子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(1):105-115

(Issue Date)

2013-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005366>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005366>



第二次世界大戦中の女子学徒の工場労働の経験と戦後の職業指向への影響 —三つの事例から—

Factory work experience by high school girls during World War II and its influence on their orientation toward work in post-war years -through experiences in three cases-

曾 我 邦 子*

Kuniko SOGA*

要約：他の先進諸国に比べて日本の女性の就業率は低く、離職率は極めて高い。これを女性の「働く（生産活動に従事する）」と「働かない」という二項対立の意識として受けとめ、その要因を国や企業社会の方策により生じた労働環境や伝統的性別役割分担意識に結び付けることは従来行われているが、エイジェントとしての女性の意識にも一因があると思われる。本稿では、その手掛かりを多くの日本女性が強制的に労働に参加させられた第二次世界大戦中の学徒動員制度下の労働体験に求め、それを探ることを目的とする。研究方法は、3人の元学徒からの工場労働体験と戦後の人生についての聞き取りを通して、その体験をどのように内面化し、生きる上で具現化したのかを探った。その際、アメリカで発表された同じ戦時下での女性の労働経験についての研究結果を参照した。その結果、精神的、経済的自立への力の取得を可能にしたアメリカ女性に較べて、日本女性は、言われるままに信じたことに対する反省から、自己決定と客観的状況の認識の重要さへの気付があったこと、また失われた学びの機会を取り戻すという願望を強い学習意欲に変えたことが明らかになった。戦後、この学習意欲が職業労働と教養の獲得・向上と言う二つの異なった方向に向けられたことが分かった。これら二つの方向への指向性は現代の女性にも影響をあたえていると思われる。

はじめに

戦後60年あまりが過ぎ、日本では現在約60%の女性が生産労働に参加している。今や女性が職業を持つことについて、違和感をもつ人はいなくなったと言ってよいだろう。その反面、未だに女性を「家庭と仕事の二重役割を果たす人」と捉えたり、子育て期の女性が親や夫などから「家庭か仕事か」の二者択一を迫られ、退職を選ぶ傾向があること（Halloway p.188）、高等教育を受けた女性の就業継続率はOECD（2007）による調査対象30カ国中29位と非常に低いなど、日本における女性の就業率は他の先進諸国に較べて低い。言い換えれば、「働く（生産活動に従事する）」と「働かない」の二つがあたかも二項対立であるかのごとく受けとめられている。これらは、日本の女性労働の特徴であると言える。

このような特徴が生じた原因の多くは、未だに社会に残存する伝統的性別役割分担意識、及び女性を第二の労働力として位置づけることにより高度経済成長を果たした過去の労働政策とそれに誘因されて生じたいわゆる「企業社会」にあることは疑いない。しかし、社会的現象は複雑な諸要素が複合的に絡み合い生起する。

本稿では、この女性の「働く」と「働かない」に関する意識を生み出した一端を考察するために、その舞台を過去に辿り、第二次世界大戦中の女子学徒の工場労働の経験がその後の職業指向にどのような影響を与えたのかを探ることとした。ここで第二次世界大戦中の経験に注目する理由は、戦争という社会的に強力なインパクトがあった時期に、ほぼ全員といってよいほど多数の女性が労働経験をした、という他の時期にはみられない社会的現象が起こったためである。

例えば、アメリカでは、戦時下での女性労働の経験を1980年代に振り返ったいくつかの研究がある。後述するように、これらの研究によると戦時下で働いた経験が、その後の女性の労働意識に影響を与えているという。日本でも戦時下の女性労働に関する研究は多い。それらを整理すると次の4つに大別できる。

1) 女性労働者に関する国家政策の労務管理や職務編成に関するもの（佐藤，2003）、2) 大戦時より以前から生産労働に従事していた女性の就業あるいは仕事の仕方や内容に関する戦前・戦後の連続性と非連続性に関するもの（谷野，堀，1991）、3) 女性を労

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

（2013年4月1日 受付）
（2013年7月1日 受理）

働者、主婦・母、独身成人、学生・生徒などの未成年に分類した上で、国家への貢献を組織化した国策に関するもの（Miyake, 1991, 西川, 1982）、4）戦時下の空襲や危険な状況の中で強制された肉体労働の辛い体験を綴った手記など（永原, 米田, 1986, 当時の女学校や専門学校の記念誌や郷土の空襲の記録など）。

この中で本稿に関係が深いものは4番目に挙げたものである。言論の自由が認められた戦後に発表された手記には、「働く」ことについての個人的な感情や考えを率直に述べているものもある。

しかし、戦時下での労働経験が戦後の女性の人生、特に「働く」ことをめぐる考え方や意識に与えた影響については未だ十分に検討されていない。したがって、本稿では女性たちが戦時下での労働経験をどのように内面化したか、すなわち、その労働経験の受けとめ方が異なる女性たちが、その後同じように高度経済成長期を生き抜いた過程で「働く」と「働かない」という二つの考え方や意識に与えた影響を、三つの聞き取りの事例から明らかにする。

ここで対象とするのは、戦時下で高等女学校に在学し、学徒動員で工場労働を経験した人たちである。当時は国策として、女性は既婚及び成人未婚と学徒に分けられ、前者には出産、育児の人的再生産と地域の保護と連帯維持が課され、後者には従来男性の領域とされていた諸職業への就業、軍需品の生産を主とする工場での労働が課された。当時の高等女学校の生徒は中間層の家庭の子女が多かったが¹⁾、その人たちにとっては戦時下という事情がないならば工場労働は勿論のこと、家庭外で働くことも規範化されていなかった。

しかも、この学徒たちが戦後学業を終えて結婚、家庭を築いた時期は日本の高度経済成長期に重なる。そのため、この時期に日本社会でその数を増した中間層の女性たちを意識面でリードしたと思われる。また、この女性たちは現在労働市場で活動している女性たちの祖母の世代であり、生活上で直接の接触があった人たちである。人生をどのように生きるかについての価値観や意識などは、祖母、母、親族や知人の女性たちが日々の生活の中で示す姿勢、行動、語り、「口ぐせ」などを通して次世代へと伝えられることを考えると、現在、成人としての活動期に入っている女性たちにも影響を与えていると思われる。

したがって、これらの人々からの聞き取りを通して、以下、戦時下の労働経験—たとえ強制されたものであっても—が戦後の生き方をどのように牽引したのかを考察したい。この手法は、前述のアメリカの戦時下での女性労働研究の多くが、1970年代後半から収集されたいわゆる Rosie と呼ばれる女性たちからの聞き取りを基にして作成したライフヒストリーに倣ったものである²⁾ (Coleman 1995, Gluck 1987, Honey 1984)。

I. 研究の方法と研究対象者

本稿に用いる資料は前述の既に出版されている学徒動員経験者の手記などと、戦時下での労働経験と戦後の生き方について現在84才のTさんと83才のIさんから聞き取った記録、そして少し古い、1978年に本執筆者が当時50才代だったSさんから聞き取った記録である。3人とも、昭和17年に高等女学校に入学し、第3学年の昭和19年9月から終戦の20年8月までは学校での授業は無く、毎日工場労働をした。3人に半構成法によるインタビュー³⁾を行

い、体験を聞き取った。後日、そのインタビュー記録をインタビューに示し、内容について本人の確認を得た。本稿の資料はこのインタビュー記録より抜粋したものである⁴⁾。いずれの場合もインタビューは本執筆者である。Tさんには、ある高齢者大学のライフヒストリー講座を受講していた際に（2009/6月～9月）、Tさんが語り手、本執筆者が聞き手のペアで4回（各約1時間半）に亘って聞き取った。Iさんには、2013年2月にIさんが主催するNPOの事務所で4時間ほどインタビューを行った。Sさんは、1977-78年に本執筆者が戦時中の体験とその影響について女子学徒動員の経験者45人を対象に行ったアンケート調査と、その中の5人にインタビューを行った調査研究の際の対象者の一人である。Sさんへのインタビューは本執筆者とSさんの共通の友人宅で4時間ほど行った。以上3人の調査対象者は同じ年齢の時に似通った経験をしながらも、それ以外には全く接点がない。これら3人からの聞き取り内容を比較検討することにより、戦時下で若い日本女性が得た経験とその影響の多様さと複雑さをよりよく把握できると考える。

なお、データの考察にあたっては、アメリカでの類似の研究結果と比較しつつ検討する。日米では歴史や文化の違いはもとより、第二次世界大戦中および戦後復興の過程において戦勝国、敗戦国の違いがあり、双方の女性たちの経験が異なることは当然であるが、日本の女子学徒が置かれていた労働条件とその下での労働経験がいかなるものであったかを明らかにするための手掛かりとした。

II. 戦時下での経験

1. アメリカの場合

現在でもアメリカのジェンダー問題に関する印刷物などの挿絵や表紙によく使われる「Rosie the Riveter（リベット工のロージー）」は、第二次世界大戦中に航空機工場でテスト飛行のパイロットを務めた女性から、軍需工場で機械のビス止めなどの肉体労働に従事した女性たちすべてを象徴するシンボルとして用いられている⁵⁾。赤地に白い水玉模様のバンダナで頭を覆い、顔には美しい曲線で眉毛を描き、目にはマスカラで睫毛を強調するメイクアップを、指にはピンクのマニキュアをしている。しかし、その作業着の襟元に身分証明のバッジが付いており、作業着の右腕の袖をたくし上げ、握りこぶしを振り上げる女性の頭上に”We Can Do It!”と記されている。このRosieは、戦時下のアメリカが女性に求めた互いに矛盾する面を表しているともいえる。すなわち、顔のメーキャップ、爪のマニキュアで女性の美しさをアピールし、バンダナでは家庭を守り、家族のために尽くす主婦の姿を表し、腕まくりして掲げる握り拳は戦場で戦う男性に代わって軍需品の生産に従事する労働女性の逞しさを象徴している (Honey p.136, Coleman p.69)。すなわち、このRosieは従来の労働者階級の女性から、それまでは専業主婦であった中間層の女性までの広い範囲の社会階層の女性が戦時下の工場労働に従事したことを表している。

これら女性労働者の動きも当初は、経済的理由により低賃金、単純作業などの女性特有の職業についていたRosieたちが、従来には男性の領域であった職場に移り、男性並みの賃金を得るようになったとされている。ところが、1941年12月の日本軍による

Pearl Harbor への攻撃後は、国民全員の参加を求める総力戦の様相を呈した。この時から、従来は家庭内に留まっていた Rosie たちも労働の場に加わるようになった。アメリカにとっては、軍需産業の生産能力を可能な限り上げることが勝つための重要な鍵であった。女性労働者数を増す必要に迫られた政府や雇用者側からの勧誘は、直接には車や家電製品の製造者が軍需品に切り替えた際に出した求人広告によって、また、間接には女性雑誌、特に従来は中間層の家庭婦人を対象にした雑誌にも家庭から出て工場労働に挑む女性をテーマに描いた小説を掲載するなどの手段が取られた⁶⁾。さらに、結婚退職を規則としていた会社が、既婚女性を雇用し続けるという方針に変えたところもある (Coleman p. 25)。なお、アメリカでは、工場労働への呼びかけは成人女性を対象としたもので、後述する日本の場合のように就学中の未成年女性に対する強制動員はなかった。

このような社会の動きにより、1930年に23.6%であった女性労働力率は1940年には27.9%、1944年には37%と上昇した。650万人の新入女性労働者の半数近い300万人は既婚女性が占めた。特に、航空機、船舶、武器製造では、1939年に8%だった女性比率は、1944年には45.3%に上昇した。社会経験が浅い若い女性が愛国心に駆られ家庭の外に初めて出て、工場労働に応募した時の義務感と不安が入り混じる様子が次の語りから窺える。

「造船所の溶接工の仕事に行った初めの日だったわ。まず、仕切りのある小さな部屋に入ったの。そこは、男性労働者用のシャワー室のようだったけれども、よく憶えていない。まず、防御用のヘルメットをかぶって、針のついた器具を持って船の仕切り壁に沿って溶接機を滑らせ始めたの。そしたら、滑って床に落ちてしまい、『めちゃくちゃ』になってしまって、どうしたらいいか分からなかった。ヘルメットを脱いで、泣きだしたの。『こんな仕事をするには、若すぎる。まだ幼いんだもの』と15分、20分と泣きじゃくっていた。でも、『どんなことがあってもやってみるんだ』と自分に言い聞かせたの。それから、仕事はどんどんうまくなって、職位もぐんぐん上がって、ついには職場のトップになった。あとは全てが順調だったわ。」(造船所の溶接工) (Coleman p.20)

当然、雇う側の工場主や雇われる女性の親族の男性からの抵抗があったことも事実である。女性を雇わねばならないために、軍需品製造工場への政府による転換要請を拒否した工場主もいる。実際、Pearl Harbor の一年後には、75万人の女性が軍事工場での仕事に応募したが、実際に雇用されたのは8万人くらいであった。しかし、1943-44年には、潜在労働力である家庭の主婦への呼びかけが強められた (Coleman p.65)。また、「幼い子どもがいる母親たちの雇用を禁じるような規則を雇用者たちが設けることを禁じ、賃金を稼いで働くか否かは、個々の女性が各自の状況に合わせて、自主的に決めるよう」という公式方針も出され、育児に専念していた専業主婦までもが求人の対象となり (Coleman p.49)、多くの職場に託児施設が整えられた。特に、就業経験が殆どなかった中間層の女性が家庭から出て働くためには、従来の「女性は家庭にあり、家族の幸せのために尽くす」という意識を変える必要があった。次の娘の語りからも当時の家庭内の事情が伺える。

「私の母も当然国民としての務めを果たしたいと、働きに出ようとしたら、父が『絶対にダメだ』と強く反対したの。それで、

母は雇用主に『部品を家に持って来てくれるように』と頼んで、家で組み立て仕事をしたの。最初は怒っていた父も、母の仕事振りを見て感心し、最終的には母の仕事を誇りに思うようになったわ。」(テリー・ジアンシネッティ) (Coleman p.45)

戦局が激しくなるにつれて、肉体労働だけではなく、高等教育を受けて専門知識を有し、責任ある監督的な働きが出来る女性も必要とした政府は、次のような小説を中間層女性対象の雑誌に掲載した。

「アンドレ・センラックは、合板製造工場主の娘で、大学で化学を専攻した。父親は、自分に万が一の事故が起こった時に備え、自分が考案し秘密としている木材処理方法を娘に教え、覚えておくようにと日ごろから言っていた。(中略)ある日、従業員の中に敵の工作員がいる疑いが浮上した。その矢先、何者かによって父親の車が山道で転覆させられ、父親は大怪我を負ったので、アンドレがその工場の総監督を任された。(中略)しかし、女性工場主の命令を快く思わない男性従業員の反撥で工場の操業が完全に停止してしまう。父親から、『決断の仕方を学べ。速やかな決断が出来るように。従業員の信頼を失ったら終わりだ。決断能力があることを示せ。躊躇したり、臆病になったりする様子を絶対に見せるな』と言われ、その通りに行動した。その結果、男性従業員もアンドレの危機管理能力に感心し従うようになった。」(Honey pp. 89-99)

以上のように、戦時下で、仕事の男性領域と女性領域の間の垣根が取り払われ、アメリカ女性たちは、身体的強靱さ、知的鋭敏さ、勇気、困難な課題を完璧にはたす能力が試された。さらに、職場での昇進もあり、リーダーシップも任されて、決断力、監督・統合力などを養った。男性の仕事を男性同様にこなせることを、男性にだけではなく、自分自身にも納得させる機会を得た。それらの能力、技術力は、その後の社会においても市場価値があった。家庭外での仕事からそれなりの収入を得る可能性も確認した。「アメリカの戦時中の生産力は奇跡と言えるものであり、その大部分は女性労働が可能にした」との報道もあり (Coleman p.19)、勝利は女性たちが勝ち取ったという意識も強かった。

2. 日本の場合

大戦中に日本女性の国民服として着用が義務付けられていたのがいわゆる「モンペ」である。これは従来農村婦人の仕事着であったものを原型として、戦時下の非常事態で女性が活動し易くするために、和服の不都合な部分、すなわち、長い袂を切り、幅の広い帯を取り、大きく開く裾を閉じて、和服でも洋服でもない形となった。一方で、女性の生活の「本質的」なもの—子どもを生み育てること—を生かすために、胸元は広く開く着物の形が残されている。そして働くときには補助着としてエプロンとか、ズボン式のものを着いた (毎日新聞社 p. 235)。

このような女性用の国民服の形が示すように、既婚女性には「国家繁栄のために生めよ、増やせよ」の国家によるスローガンのもと、人的資源の豊富な確保のための再生産と日常生活上での戦争協力、また、出兵によって男性が不在となった農村の主婦たちには食料生産の役割が課せられていた。戦局が厳しくなると既婚女性にも家庭での内職や工場労働による軍需品の生産への協力を求

めたが、多くの主婦たちは、家庭内で手仕事やミシンで、軍用手袋などを作った。1942年末には、大日本婦人会が勤労報国隊の結成を全国支部に指令し、家庭婦人の生産参加を進めた結果、1943年前半では300万人の女性を動員したという記録も残っている。

しかし、戦時期全般に亘って物的資源を生産する工場労働の役割は、女子挺身隊動労令により軍需工場での一年間の労働を義務づけた未婚で在学、就業していない12才から40才の女性と、学徒動員制度により高等女学校、専門学校に在学する学徒に課せられた。女子挺身隊対象者の中には罰金を払ったり、親や親族の助けで事務職に就いたりして、工場労働義務を免除された者もいたが、学徒は学校単位で纏まり、学業の一環として動員されたために欠勤も少なく、安価で安定した労働力とみなされていた。学徒への報酬は、年齢によって差があったが、男子生徒には月額50円、女子生徒へは40円であった。この男女学徒の労働力は国家が利用できる最後の砦であり、1944年には国家が保有する潜在労働力の69%を占めていた (Cohen pp.316-328)。したがって、戦時中の女性の家庭外、主として工場での労働経験とその影響を論じる本稿では、学徒動員された女子学徒の経験に焦点をあてる。

学徒動員制度が実施された1943年頃には、高等女学校数や在籍数は男子中学校の倍近くであった (文部科学省2012)。これは、日中戦争の中、将来続く戦いに女性の協力が必要であることを見越して、従来の家族制度の維持のために「女は家庭に」を基本としてきた女子教育を見直し、非常時下の国民としての責任を担うためにより高度な知識や技能が必要であるという声の実業界などから出されたために、女子大学の創設、現行大学の男女共学、高等女学校の男子中学校との同水準への引き上げが提言され、高等女学校が増設されたためである。したがって、動員された学徒は205万3千人、女子はその半数に近い43%、92万5千人であった (永原 p.82 & p.111)。前述したように、高等女学校に在籍していたのは中間層の家庭の女子が多かった。

学徒戦時動員体制が確立、断行された1943年に、各学校は校舎を工場の作業場として軍需品生産校内作業を引き受け、生徒がその仕事に従事した。動員期間も当初は夏季休暇中であったが、30日、120日と延長され、1944年には通年動員となった。また、学徒動員体制の管轄が文部省から厚生省に移され、学徒たちは校内作業場を出て、航空機、繊維、金属、ゴム、製薬、電気などの工場へ出かけて行き、女子生徒の深夜作業まで実施された。

この学徒動員制度によって工場で働いた学徒たちがどのような環境に置かれ、どのように感じ、どんな思いを持って労働に従事したのかについての一般的な状況は以下の手記から伺われる。

「身体検査のあと寄宿生活が可能と診断された人たちは村から電車で6時間のところにある明石の軍需工場へ行くように言われた。何も知らないところへ行くのはとても不安だった。でも絶対に怖がっていることなんかは他人には見せないでおこうと心にきめていた。

三人の先生たちが明石の工場に引率し、寄宿舎にも一緒に住んだ。工場には、遠い和歌山県からの女子生徒も来ていた。大きな工場は真ん中に仕切りがあって、片側は女子生徒が反対側は男子生徒が集められた。到着したら直ぐに寄宿舎での日課の説明があり、仕事では金槌の持ち方と鑢の使い方を教えてもらった。次の

日は一日中その練習をして過ごした。夕方、グループでジュラルミンの板で、『かご』のようなものを作った。(中略)

学徒の就業時間は工場の労働者よりも短かった。私達よりも長い時間働かなければならない女工さんたちは気の毒だと思った。でも、優しくしてくれる女工さんもいて、お里から食べるものを送ってもらった時など、私たちにもかならず分けてくれた。(中略)

ある夜、空襲警報のサイレンが鳴って、寄宿舎内のあちこちから叫び声が上がった。その後数日して、引率の先生たちが、村にある紡績工場主に話して、そこでの働き手が必要だと役所に申し立てをしてくれたので、村に帰ってきた。それから数日後に、明石の工場は空爆されて、和歌山から来ていた生徒の数人が亡くなったと聞いた。」(兵庫県婦人問題研究会 pp.1-10)

上記のような状況下での危険な労働や労働環境についてインタビューのIさんは次のように語っている。

「ある日の午後3時頃、いつものように鋳型に鋼板を挟んでプレスで抜く仕事を二人でやっていた。私が鋼板をはさんで、相手が機械のボタンを押すとプレスが上から下りてきて、鋼板を切断した。その時、私がまだ『ハイ』と言わないのに、相手がボタンを押してしまった。突然親指の先が切断されて、私は気を失った。午後3時は、どこでも事故が起こりやすい時間帯と言われていた。その友人はそれ以来毎年の年賀状に、『済まない事をした』と謝ってきていた。女学校卒業50周年記念誌の依頼された投稿記事に、私はその事故のことを書いた。そして、その友人に『もう、これで終わったことにして、忘れてください』と告げた。50年間もあのことを心に掛けて、苦しんでいた友人を気の毒に思う。」

しかし他方では、上記の手記にもあるように当時の高等女学校生とは日常的な接触がないような女工、貧しい家庭の子どもや親族以外の男性との交流もあり、ある種の社会性を開く機会となったこともIさんは語っている。

「板金の仕事がうまく出来ないと、徴用工と呼ばれていた小父さんたちにいつも怒鳴られていました。通常は魚屋、八百屋、大工なのですが、兵役に行く代わりにそこに来ていました。ほかに、養成工と呼ばれる小学校を卒業し、まだ幼い感じのする人たちがいました。この人たちは、家庭の事情で小学校以上へは進学できない子供たちを、小学校卒業後に採用して、工場で働きながら勉強もさせて、職を身につけるように養成していたのです。今でも、あの子ども達の青白い顔や、痩せた体などは目の底に残っています。」

他方、Iさんには女子学徒が憧れるような存在である若い飛行士との交流もあった。「神風」と呼ばれる人に対して、軍国少女とは言え人間の目線で見たとき、かすかな疑問が心に浮かんでいる。

「自分たちが作った木製の飛行機に乗って突撃する若い飛行士も沖縄に行く前に女学生たちと話をしたいという申し出があって、工場に来て、生徒たちと話をした。彼らは、自分たちが受けた任務を非常に誇りに思うと語っていました。映画に出てくるようなあの白いスカーフをして、明日は死に行く人たちなんですよ。

私もその場にて、その人が話していることは『本当にすごい』と思ったけれど、また『本当にそうなのかな』という疑問も浮かんだ。人前では、あんな顔をして話しているけれど、一人にいる

ときはもっと悲しい顔をしているのではと『ふと』思ったりして、胸の中で納得し難いような、複雑な思いで座談会に出ていたんです。」

もう一つの稀な出会いは、通学の交通機関でも分けられて交わることが無かった同年代の男子生徒たちと同じ工場で働いたことである。仕事場では衝立でわけられていたが、昼休みにそれぞれのグループで話している話題などは聞こえてきて、学校制度による教育段階からの男女差別の実態も知るようになった。

「中学生が西田哲学の論争をしているのを聞いて、学力の差を知りました。女学校とは教科書自体に差があり、女子教育は何だったのかと怨念のようなものがあります。」

「戦争中の英語廃止についても、女学校はやめさせられたのに、通達には「ただし中学生はその限りにあらず」とあったなんて〈中略〉戦時中も中学校だけは英語を続けていたのです。」(戦時下勤労動員少女の会 p.149)

さらに、そのように差別された学校制度下では得られない知識や技術、特に、女子生徒には従来馴染みが薄かった理工系分野に触れる機会があった。

「航空機のエンジンの修理は動員女学生の熱意と俄か仕立ての技術だけではどうにもならない経験と勘の世界だったが、(中略)若い上司は、出征の前日まで自分の知りうる限りの知識と経験を私達に伝えようとした。あと片付けをしながら口述してくれる修理対策を夢中で筆記した。」(戦時下勤労動員少女の会 p. 105)

これら男子中学生の様子を身近に見たり、理工系分野の知識や技術に触れる機会があった事実はすでに他でも指摘されているが、この様な状況の中から将来の職業の可能性を広げることも出来たことにも注目したい。例えば、インタビューイーのTさんは次のような経験をして、自分の能力への自信を得ている。

「工場では、何故か優遇されていたと思う。ハンダ付けなどしている人が多かったけど、私と他の4人が選ばれて化学分析をさせられた。『あんたたちだけが研究の仕事』という目で見られていた。毎朝、『ピーカーに水をいくら入れて、塩酸を入れて』とか書いてある紙をもらった。飛行機に積むための酸素発生剤を作っていた。その仕事には結構興味が湧いて、卒業したら化学分析の研究職に就きたいと思ったこともある。」

一方、同じ状況下でも、異なったことに心を向けた人もいる。インタビューイーのSさんは、動員期間が長引くにつれて、以前に学校で過ごした自由な時間や教室での新しい知識の習得などが懐かしく、それを取り戻したいと思う強い願いを抱いたと語っている。

「休憩時間には、皆でよく歌をうたっていました。好きだったのはフォスターの『故郷』でしたが、アメリカの歌だということで禁止され、歌の本も取上げられました。それで、友人5人で和歌のグループをつくり、詠んだ和歌を墨で書いて小冊子にし、読み合った時は、押しつぶされそうな工場の雰囲気の中で、まるで『そよ風』が体の中を吹き抜けていくような気持ちになりました。その句集は今でも大切に持っています。特に空襲で亡くなった友人の和歌を読むと涙が止まりません。」

したがって、敗戦に際して、「私はあの日(1945年8月15日)に死んだ」と言った元少年兵がいた(Plath, p. 51)と伝えられる

中で、「よかった。(中略)助かった」、「明かりをつけられる」(兵庫県婦人運動史研究会 p. 19)と言った女子学徒は、失ったものをこれから取り戻せるという希望を持ったと察せられる。

3. 小括

板金カッターや電気ドリルの操作など従来男性に限られていた肉体労働を日米の女性たちは体験した。家庭から出て、国家のために肉体労働をする選択をしたアメリカ女性たちは、当初の戸惑いや家族や男性労働者たちからの反対に抗しなければならなかったが、技能が上がるにつれて昇進や監督責任を任せられる機会もあり、自己実現の充実感や高度な技術や知識を取得する達成感も得た。それなりの報酬も受け取れたので、戦時下の労働経験はアメリカ女性にとっては、社会での「就業」に直接つながる経験であったと言える。特に、アメリカでは、成人女性が自主的に参加した労働であり、たとえ専業主婦が家庭での責任をある程度犠牲にすることはあっても、何かを失ったというよりは新しい経験を得たというプラスの意識の方が強かったと察せられる。

一方で、同じような仕事をこなしながらも、日本の女子学徒にとっては学校活動の一部として強制されたものであった。したがって、その労働は、実際に社会において「働く」、「就業する」という意識とは重ならなかった。むしろ、身体的辛さ、ひもじい思い、空襲の恐怖につらなる思い出したくない体験でもあった。

とは言え、事故や空襲などによる生と死のはざままで、精神力、忍耐力が試され、強められた経験でもある。工場で男性と同じ仕事をやり遂げたことにより、アメリカ女性と同じように、伝統的に当然と思い込まれていた知的、能力的、特に従来女性が排除されていた理工系分野の技術力、及び肉体的男女差があまりないことも認識した。同年代の男子学徒との出会いからは、むしろ社会における男女差は学校制度などにより作られることにも気づいた。また、通常の女学校生活では、概念的なイメージしか持てなかった女工、養成工、神風飛行士などより広い社会の人々との接触があり、多様な視点を養うことが出来た。

他方、学業の半ばで思いもよらない工場労働を強制された女子学徒たちは、休憩時間には和歌を詠んで心の安らぎとしていたように、女学校生活について入学時に抱いていた期待や願望が裏切られたという思いも強かった。すなわち、女学校生活とは、国語で源氏物語などの古典を学び、音楽で西洋の歌に触れ親しみ、英語で世界への扉を開くという学科の学習以外にも、文学や芸術、スポーツ等にも関心を広げ、それ自体を楽しむ期間を享受することでもあった。なかでも「読書」は、「勉強」や「友達付き合い」に並んで女学生生活の重要な柱であった(稲垣 p.19 & p.37)。

まさに、戦時下での工場労働に参加したのが、アメリカのように成人女性でなく、学びの途中でその学びの機会を犠牲にしなければならなかった成長途上の学徒であったことも、アメリカ女性による労働経験の受け止め方とに違いが生じた要因であると察せられる。

Ⅲ. 戦時下の経験が戦後の「働くこと」に与えた指向性

1. アメリカの場合

戦後となり、兵士が帰還し職場復帰を始めた1945年末までには300万人の女性労働者が職場を去ったが、政府婦人局が工場労働に当時従事していた女性13,000人を対象に行った調査では、その75%が仕事を続ける事を望んでいたことが判明している (Gluck p.16)。一方、男性たちが家族のもとに帰ったり、結婚したりするようになると、「Father Knows Best」⁷⁾などの番組で、一家の中心となる父親、専業主婦の母親そして子ども達がいる物質的に豊かなアメリカの典型的中流家庭像がテレビで広まった。

そのような戦後の状況を鑑みて、Gluck (1987) は、戦時下で家庭の外で働き、世間の動きに触れ、高い賃金を得て経済力を蓄えた女性たちについて、「その経験から得た自信と独立の精神は消え去ったのであろうか」、「女性たちは抵抗もなく『元の木阿弥』に戻ったのであろうか」という疑問への答えを、女性たちのライフヒストリーを通して探った⁸⁾。その結果、女性の就業率など統計上目に見えることには大きな変化は見られないが、変化の「大きさ(差)」ではなく、変化の「プロセス」が重要であることが判明したと、次のように述べている。

労働階級の女性たちにとっては、戦時中に得た高い賃金は戦後の生活を支える経済力になった。貯金で家を買った黒人女性は、従来の低賃金のサービス職に戻っても自力でその家を持ち続けた。実際、「私たちが白人女性の台所(家政婦の仕事)から解放してくれたのは、ヒットラーのおかげ」と言った黒人女性もいた (Coleman p.31)。他方、従来専業主婦だった人たちは、雇用チャンスがない、夫が就業に反対する、幼い子どもがいる、あるいは自らの希望で家庭に戻った。しかし、「I can hold my own with man. (男たちと対等にやっていける)」という自信は、その後の女性の意識、姿勢、行動を支える精神力となった (Gluck xiv)。伝統的な、また周囲の人の目を通してではなく、自分自身の目で自分の可能性について価値を発見し、自らに誇りを持つようになった。しかし、このような内面的変化は、必ずしも直ぐに、統計などに示される具体的な社会現象としては表われなかった。むしろ、女性の心の中、家族や身近な人々、特に夫との人間関係にゆっくりと、密かに、微妙な変化をもたらした。特に、娘たちの養育にあたって、将来社会での仕事への十分な準備をするために、高等教育を受け、自立するように促し、高い期待を娘に抱いた。

さらに、60年代のアメリカ社会において大きなうねりとなった公民権運動においては、人種差別の中に性差別と類似した構造があることを捉え、その運動に積極的に参加し、精神的サポートも与えた。その運動の成果として開かれ始めた社会での活動の場へと自分たち自身も徐々に進出し始めた。その過程で、または地域共同体のボランティア活動を行う中で、専門的知識や技術の必要性を認識し、自ら大学、大学院で学び、本格的な職業能力をつけて就業へとたどり着いた人々もいる⁹⁾。Gluck は、「Father Knows Best」のようなテレビドラマは、当時の女性たちが抱く理想像ではなく、むしろ女性たちの外へ向かっての動きに抗して、伝統的な性別役割分担へと押し戻そうとする反動であったと述べている (Gluck p.268)。

したがって、アメリカ女性にとって第二次世界大戦下での労働

の経験は、それ以前から少しずつ動き始めていた女性の自立への流れに力強い一押しを加えた Gluck はまとめている (Gluck p.269)。

2. 日本の場合

戦後、連合国軍最高司令部の強力な後押しにより女性に選挙権が賦与された後、1946年に行われた衆議院選挙では39名の女性が議員に選出された。政治、労働組合などの領域では、戦前の婦人活動家を主体として女性の家庭の外での活動が活発に始められた。各地の労働組合に婦人部が設けられ、主婦による地域の婦人会の活動も活発に行われた。その後、一般女性も戦後の食料難を反映した消費者運動や、米軍基地反対、原水爆禁止から安保闘争へと繋がった平和維持運動、また子どもを守る母親大会などに社会階層を越えて多くの女性が参加した。しかし、50年代後半には生活も比較的安定し、60年代の高度経済成長期に入る頃には、国会に選出される女性議員の数は減少し始めた。市民運動への参加も下火となった。丁度、戦時下で学徒動員された女子学徒が学校に戻り中断していた学業を終えて、結婚、子育てと、成人として生きた時期に重なる。

1) 学徒動員経験者の語りから得た戦後の職業指向への影響

ここで T さん、I さん、S さんの戦後の人生についての語りを以下に引用し、学徒動員された女子学徒が戦時下の工場での労働経験とその経験に関する思いを、どのように戦後の人生に織り込み、「働く」ことについての意識、姿勢、行動を形作ったのかを考察する。

① I さんの場合

「授業が始まって、西洋の歌が歌えた音楽、源氏物語の国語、メンデルの法則の生物など最高に楽しかった。海岸へ小旅行したとき、小船に乗って「ローレライ」が歌えた時は嬉しかった。戦時下では、知識にも食べ物にも飢えていて、容易に手に入らないというもどかしさもあったので、後の人の高校時代では得られないものを吸収していたと思う。知的、情緒的なものに対する感受性は強かった。また、先生や友人との関係の中から、他の人への思い遣りの気持ちなど、学び取るものが多かったと思う。

そんな女学校時代のことを思うとき、青春を奪われたという思いは強い。豊かであるはずのすべてが奪われたことに怒りを感じ、いとおしく思う。私達の世代は本当に教育を受けられなかった。私は無知であることにコンプレックスを持って生きてきたので、いつまでも学び続けたいという気持ちは強い。

高等女学校卒業以前から上の学校に進学したいと考えてはいた。父親は『これからの女性には何か資格を持たないといけない』と言って薬剤師になる薬専を勧めてくれた。しかし、女子専門学校の家政理学科を受験したら、合格したので薬専は受験しなかった。その時の応募理由には、『動員で行った工場で働いていた幼い養成工のような人たちが、健康的になれるような食事について学び、研究したい』と書いている。あの人たちの青白い顔は今でも目前に浮かんでくる。

女専を卒業する年の1月に、ある組織に入った。丁度、全学連結成期で、「日中友好協会」や「社研」に属しての活動を通して形成

されつつあった自分の考えを全うするためにと考えたから。

卒業後は、もう少し勉強がしたくて、仕事の当てもなかったけれど、両親から5,000円をもらってとにかく東京へ行った。「腰かけ」仕事をしながら次のステップを探していた。バスガールも考えた。この頃から、いろいろな可能性を試して、納得する方向へ進むというようになったと思う。

それまで何か分からないままに生きてきたという意識が心の深層にあった。言われたことをただただ信じていたことを、間違っていたとは思わないけれど、失ったものは大きかった。そして、戦後のあの混沌とした社会の中で生き方を探っている時、何か自分が納得しないことはやらないということで突き進んできたように思う。(他から)言われた場合に、そうでない部分(異なった見方)もあるのだということを書いていないといけなと、その後の生き方の中でずっと思っていた。

東京では、組織の新聞の編集、広告取り、時には発送までを任されて、仕事をしていた。夫も全学連関係の新聞の編集をしていたので、夫婦で「職業革命家」だった。でも、夫も私も組織の人間にはなれなかった、それで組織からは次第に離れていった。

夫が解雇されていた間は、私が働いて生計を立てた。そんな状況下で、私は自分が働かない生活ということは一切考えてなかった。仕事をするのが当たり前と思っていた。自分の母も教員で、後に県会議員になった父が物書きをしていた頃は、母が生活を支えていたことも影響していると思う。子どもが生まれた後も、夫と私の勤務地が異なっていた3年間は、私が単身赴任をして週末に家族のところに帰った。下の娘が『お母さん、夜になったら家に帰れる仕事に代わって』と泣いて泣いた時は、私も辛かった。でも、私にとっては仕事をしていることは大切だった。

高校では家庭科を担当した。食物、保育など人間が生きることに関わる教科なので、私の考え方などが語れた。家事、裁縫は古いという考えもあるけれど、人間が生きていく上で欠かすことは出来ないし、その中に人の生き方が現れてくると思う。しかし、そのすべてを家族の誰か一人が負うことに関しては、「徹底的に」やった(反対した)ので…。そのせいだと思うが、女性の自立を望んでいる生徒が多いクラスが贈ってくれた色紙に、『家庭科の授業の中に生き方の指針があった。先生のような生き方をしたい』と書いてあった。

教職の傍ら、ある出版社の家庭科の教科書の編集に20年間携ってきた。その出版社は家庭科の男女共修が制度化される以前から、その方向に沿った内容の教科書を出していた。私も男女共修の運動を長く進めてきた。

退職後、地域の高齢者に給食サービスをする NPO を立ち上げた。介護保険制度はまだ利用していないが、地域で孤立しがちな高齢者、すなわち、行政は気が付かない、あるいは気付いていても手が回らない人たちに、昼食と夕食の配達をしている。また、ショッピングセンターの一画の食堂で週4日昼食を供している。調理と配達はすべて40人くらいのボランティアがやっている。大部分が高齢者だが、近くの大学から大学生が部活動の一環として輪番で毎日一人が手伝いに来てくれる。この若い人たちに、この仕事の意義を繋げていければと願っている。ボランティアは社会的弱者の目線で見ること、相手が何を求めているかに気づくことが

大切だと思う。こう思う時、いつも目の前に浮かぶのは、動員工場で見た養成工の姿である。あの人たちが、私のボランティア活動の原点だと思う。」

② Tさんの場合

「終戦から一年も経たない頃に、近くの小学校で夜に英会話教室があると誘われて行っていた。家でも、ラジオの英会話のテキストを買ってきて一生懸命に勉強していた。

そのころ、女学校の時の友人が『洋裁学校ができたよ、一緒に行かない』と言って誘ってくれた。その時、代用教員っていうのも足りなかったので、『小学校の先生にならない』と言ってくれる友人もいた。それでも、今まで勉強もしてきてないし、好きなこととしてきてないしと思った。父も『好きなことをすればいい』と言ってくれたんです。やっぱし、自分が好きだったからでしょうね。

洋裁は師範科も出たので先生が私を認めてくれて、いろんなお客さんを紹介したりしてくれました。そのうち、大阪の株屋さんで、この近所にも家を持っていた人が、『うちのビルがあるから、そこで、洋装店でも学校でもしたら』と言ってくださったんですけど。今だったら、そんな話にも乗ったかも知れないけれど。その頃は、それがうまく行くかも不安だったし、父も『女がそんなこと(職業をもつこと)しても』と言ったので。

洋裁のほかに編み物の学校にも通っていた。その学校の近くの知人宅を訪ねてきた女性が私を見て、『息子の嫁に』という話しが、その知人を通して持ちかけられた。私の母は、その人がかなり厳しい人だという噂を聞いていて反対した。私もその気にはならなかったけれど。私の遠縁に当たる小母さんから、『あんたそんなこと言わんと。もう何才だと思ってるの』と言われて。初めは、断ったんですけど、もう、ご縁だしね。

まあ、結婚したら大変だったけれど。もう、賢い姑さんだったから。でも、母から、『お大根の切り方も何十通りあるし、お鍋の持ち方もいろいろあるから、ちゃんと聞いて、言われた通りにしなさい』と言われた。姑さんとは、子どもが幼稚園へ行く前ころまで3年間くらいは同居していた。洋裁も続けていたけど、仕立て代も、主人の給料も全部、姑が管理していた。そのころは、そんなもんだと思っていたので。

そのうち、地域の婦人会の役員に選ばれた。欠席したら選挙があって、知らないうちに選ばれていた。一応、引き受けないといけないと思って、皆で習字のお稽古をしたり、日本舞踊を習って発表会もした。子供の頃は戦争中で日本舞踊なんかしてられなかった。

とにかく、なんでも一生懸命した。知らないことは勉強した。婦人会の役員が終わったら、消費生活研究会の活動を始めて、生活科学センターへ行って勉強した。その頃はなんでも勉強するのが楽しかった。食生活指導員の修了試験もパスして、市役所での生活科学センターで食・生活に関するモニターもした。そのうち、センターに保険に関する苦情も持ち込まれるようになり、市役所の方から誰かが生命保険のことを勉強に行くようにと言われた。でも誰も他に名乗り出なかったの、自分が行くことにした。

何でもいから勉強したかったので、ある保険会社に勉強にいった。その支社長が、『お金を儲けるために勉強しに来る人はいる

けれど、保険のことを学びたいという人はあまりいないから、辞めさせないように』と部下の人に言って目をかけてくれ、市役所と近くの専門学校の担当にしてくれた。その後、他の大口加入者も何件か紹介してくれた。しかし、生命保険は親戚中の人たちに加入してもらったら終わりと一般的に言われていたし、業界の裏側も見たりして辞めようかと考えていたとき、損保保険の代理店をしている人が、火災保険の仕事を勧めてくれた。これには、夫も経理と事務を引き受けてくれた。その後、夫も損保の勉強を始めて、二人でいくつかの代理店を一つのグループにまとめる責任者になった。40代始めのころだった。代理店のまとめ役の成績も良く、毎年表彰されて東京でのパーティに出席した。収入もあったので、一ドルが360円の時代に、友人と海外旅行にも行った。顧客のところを回るために49歳で車の運転免許も取り、75歳まで約25年間その仕事を続けた。

2年前に、高齢者大学で園芸コースを履修した。絵画クラブにも属し、油絵も水彩も描いている。戦争中は出来ないことが多く、今のように、『何がしたい』など考えられる時代ではなかった。

③ Sさんの場合

「終戦後、専門学校に進みました。教師になるのが夢だったのです。二年生の時、父が亡くなり、祖父所有の土地も農地改革でなくしたので、学校を続けるのは経済的に不可能になり中退しました。軍医だった長兄が東南アジアで戦死して、我が家で唯一人の男子となった次兄や、私より頭が良い妹が大学に進学すべきだと思ったからです。担任に話したら、先生も他の中学校に移るので、そこの代用教員として一緒に行くように誘われました。『教えながら、教員免許がとれます』と言われ、3年後に免許を取得しました。そのとき、校長の息子との縁談を断ったので、居辛くなり退職しました。

その後、東京に出てある商社の事務職に就きました。一日の仕事が終わってからは、お花、お茶のお稽古に行ったり、休日には映画を見たりと、女学校時代にできなかったことを、友人と楽しみました。ある日、会社の食堂で静岡の同じ村の出身で、姉の友人の弟に偶然出会い、2年後に結婚しました。

結婚後も働き続けました。夫の給料だけでは家計が苦しかったのと、結婚後一緒に住んだ姑と一日中一緒に居るのは難しいと思ったからです。周りの人の目をあまり気にしないで、自分の考えを進められる自分にはある程度満足しています。それに、万一の場合は私も自立して生きていかねばならないと思っていたからです。結婚して3年目に長男が生まれ、退職しました。子どもが5才の時、夫はパリ支店に転勤になりました。その頃は妻が同行することは無かったので、3年間単身赴任でした。その間、子どもの学校のPTAの役員をしたり、友人が企画した「広島、長崎の写真展」を手伝ったりして外に出る機会も多かったのです。日米安保条約反対のデモにも参加しました。

夫が帰国して一年後に次男が生まれました。その後、山口県の支店に転勤になったので、一緒に行きました。そこでの3年間に、「萩焼きの教室」に通って、焼き物を趣味に加えました。それから、神戸に転勤になりそれ以来ずっとここに住んでいます。8年前に姑が亡くなり、長男が東京の大学へ行ったので、毎日、夫と次男が出かけた後は十分な時間の余裕があるので、色々なことをし

ています。三年前から、「友禅染め」を趣味として始めました。「焼き物」も続けていて、近くの美術館の「焼き物同好会」に属し、そこの釜で焼いてもらっています。子どもの学校のPTAで知り合った母親たちと読書会や近代文学研究会などは続けていて、今でも集まることが多いです。女学校の時に始めた和歌の勉強は続けています。動員された工場で、友人と和歌を詠んで交換し合った時は、本当に精神的に大きな支えとなっていたので、今後も、苦しみや、孤独を感じた時には力になると思います。人生の大切な節目に作った和歌を子どもや孫たちに残しておけば、私の生きた証しにもなると思うので。

選挙にはかならず投票に行きます。どの方向に国が動いているのかを認識して、自分の考えを明らかにする責任があると思います。

戦争は絶対反対です。ベトナムやカンボジアで起こっていた戦いの記事を読むと心が痛みましたが、ベトナム反戦デモなどには参加しませんでした。子ども達に食料や医薬品を送る寄付はしました。もし、日本で再び戦争が起こりそうになったら、夫や息子を山奥のどこかに隠して、『私が戦いに出るのだ』という衝動にかられます。」

2) 戦時下の工場労働経験がその後の職業指向へ与えた影響

以上3人から聞き取った戦後のライフヒストリーは、それぞれにユニークなものである。家庭環境も異なり、親や本人の将来への期待も異なっていたのも当然である。しかし、この3人が成育期の16、17才のときに、国家の非常事態により、それまでの生活様式（ライフスタイル）では予期しなかった、そして全く馴染みがない工場労働の経験を共有した。この事実を基に、3人の戦後の人生に表出する多様性の底辺に潜在し、それぞれの人生を牽引してきた共通点に注目すると、戦時下の工場での労働経験から獲得していたもののいくつかの点を指摘することが出来る。

一点目は、神風飛行士との対談で、「ふと」浮かんだ疑問も心の奥に収めて、「何かわからないままに生きてきたという意識が心の深層にあった。言われたことをただただ信じていたことを、間違っていたとは思わなくても、失ったものは大きかった」という思いから伝統的な概念や他から強制される考えではなく、自分で考え、将来への道を自力で拓くという信念と行動である。Iさんは戦後の混沌とした社会の中で、何か自分が納得しないことはやらないということで、突き進み、(他から何か)言われたときに、そうでない部分(異なった見方)もあるのだということを思って生きてきた。したがって、専門学校卒業時に参加することを選び、その後数年はそれに属して活動してきたが、個人の考えを制限する組織からは次第に遠ざかって行った。一方、洋裁学校と小学校の代用教員の二つの選択肢のうち「やっぱり好きな方」を選び取ったTさんは、それを内職から「仕事」に発展させようと試みた時は、父親に反対されて一度は諦めた。しかし、二度目の機会が保険業で訪れると、躊躇することなく選び取った。さらに、「周りの人の目をあまり気にしないで、自分の考えを進められる自分にはある程度満足しています」と言うSさんは、結婚退職が常識であった1950年代前半に長男誕生時まで就業を続けた。その後も、選挙には必ず投票して、自分の考えを明らかにする責任を果たし

続けている。

以上のように客観的情況の認識の重要性を知り、自己決定の強い意思を身につけたことは3人に共通している。

二点目は学習意欲に関することである。終戦前年の9月から翌年の8月までの約1年間は学業がなく毎日工場労働に通っていた生徒たちは、その失われた期間の補習授業もなく、翌年の3月には女学校を卒業させられた。そのため、3人とも「学びたい」という強い望みは共有していたが、「学び続ける」姿勢と行動ではそれぞれに異なっていた。以下に、その異なる点を中心に若干まとめておきたい。

「戦時下では、知識にも食べ物にも飢えていて、容易に手に入らないというもどかしさもあったので、(中略) 無知であることにコンプレックスを持って生きてきたので、いつまでも学び続けたいという気持ちは強い」と言うIさんは、その希望を実現するために東京へ出て、種々な新聞の仕事に携えることから得た生活力で、夫が解雇されていた時は、自分が働いて生計を立てた。また、子どもが生まれた後も、3年間は単身赴任をして週末に家族のところに帰っていた。幼い娘に泣かれた時は辛く感じたが、仕事をしていることは大切だったので働き続けた。そして、高校での教職を定年退職したときには、教え子たちから「家庭科の授業の中に生き方の指針があった。先生のような生き方をしたい」という言葉を贈られた。一方、学校制度による男女差別意識の形成を是正するために家庭科の男女共修運動に長年従事し、その実現に貢献した。退職後は、工場労働の場で出会った養成工が原点となっている社会的弱者への関心を、「行政は気が付かない、あるいは気付いていても手が回らない人たち」への給食サービスのNPOの立ち上げへとつながり、83才の現在も40人のボランティアを束ねて地域社会への貢献を続けている。

このように、Iさんには戦争によって学ぶ機会を奪われた人が抱く学習意欲の高まりがあった。同時に、戦時下で教育制度によって学びの機会や内容が差別されることへの気付きがあったために、教育制度によって自分が奪われていたものも取り戻したい、社会的弱者のためには、社会の矛盾によって奪われているものを取り戻してあげたいという欲求があり、それを成就するべく行動した。

一方、「とにかく、なんでも一生懸命した。知らないことは勉強した。その頃はなんでも勉強するのが楽しかった」というTさんは、あらゆる機会を捉えて学び続けた。偶然に選出された婦人会の役員の任務を果たす中で、リーダーシップ力を養い、生活科学センターでは他に助言する技術も身につけた。つぎに、保険会社に勉強に行き、そこで習得した知識を基に、夫も巻き込んだビジネスへと発展させた。姑に仕え、夫を助け、子供を育てるという従来の女性の生き方に加えて、新しいことを学び続けて生産活動への参加も実現した。そして、以前は内職の仕立て代を姑に渡していたが、自分の収入は、東京でのパーティに出席したり、海外旅行に行ったりして、自分自身の楽しみのために供するようになった。

他の学徒たちがハンダ付けをする中、数人だけ選ばれて化学分析を行ったことが、工場労働で最も印象深いことであったと繰り返し話していたTさんは、「何でもやればできる」という自信と、「何でもやりたい」という意欲を戦時下で得た。戦後もリーダー

シップを養い、発揮することが出来た。自分の能力を伸ばすものとの出会いにも恵まれて、積極的に学びの機会を掴み、行動に移した。

他方、「青春を奪われたという思いは強い。豊かであるはずのすべてが奪われたことに怒りを感じ、いとおしく思う」とIさんも言っているが、当時の女学校時代の青春や豊かさは、従来の女子教育の「家事、裁縫」、「万一の場合の茶道、華道の教師免許」のイメージが与える実用性だけでなく、既述したように、「常識」や「教養」の涵養に象徴されるものであった。この教養に対する憧れを、Iさんは戦後の女学校の残りの授業の中で、Tさんは卒業後1年間英会話学校に通う等して満たした。しかし、Sさんは、まず、戦後実用性が増した教職資格を取得した後、家庭生活に入り、女学校時代に自由に楽しめる筈であった読書や文学の研究を取り戻すために、子供のPTAで知り合った母親たちと共に読書会や文学研究会を実現させている。その後は企業戦士として仕事にまい進する夫の留守で生じた自由な時間や経済的余裕を、専門的で高度な技術が必要とする焼きものや友禅染めなどの美術・工芸の趣味の上達に励むために費やした。このようにして、Sさんは、学徒動員がなければ当然得られる筈であったものを回復する、即ち、お稽古事の技を磨く、知的好奇心を満たす、教養を高めるなどの学びの行動を起こした。これは、1970-80年代に「源氏物語を読む」などの趣味的教養を主体とするカルチャー教室ブームを起こした中年女性に共通することかもしれない。

3. 小括

以上の3人の選択と行動に共通しているのは、動員下の経験から得た客観的情況の認識と自己決定を行おうとする決意である。一方で、「学びたい」という願望は何を学ぶことで成就しようとしたかによって3人の間に違いが生じた。各人の学びの指向性が必ずしも職業には結びつかなかったということである。即ち、Iさんは、動員下で労働経験をする前から、その指向性は職業と結びついていた。動員下の経験から影響を受けたのは、就く職業の分野とその目的への方向を決めたことである。したがって、性差別を生み出す教育制度を是正するために教育分野を、そして社会的弱者を生じさせる社会矛盾を解決するために社会福祉分野を選択した。

一方、Tさんの学びの目的は当初は職業に向けてはいなかった。しかし、動員下で得た新しいことに挑戦する自分の能力についての自信を力にして、身近に生じた様々な学びの機会を掴み知識の獲得をする途上で、その指向性は経済力を生む職業へと結びついた。同じように自らの能力に自信を得たアメリカの女性たちも、終戦時に就業を継続したり、または、家庭に入っても、次世代の娘たちには経済的自立のための教育を受けることを期待し、物的、精神的サポートを与え、さらにそのような女性の家庭の外での活躍の場となる社会の地盤を固めるために公民権運動に参加した。

ところが、学ぶ目的を教員免許の取得に向けて、職業に結びついた指向性を示していたSさんは、まず、人生の万一の場合の安全網を確保した後は、学びの目的は動員下で奪われてしまった女学校での学びと青春の楽しみの回復となり、ひたすら教養を高めることに専心したために、その指向性は職業とは結びつかなかった。

このように日本では、動員下の工場労働経験から得た学習意欲の向かう先は異なっていた。年若い女性たちが、戦時下で得た新たな視点や視野の拡大は、戦後という社会の激しい転換期に、ある場合には職業の獲得に向かい、ある場合には教養の向上に向かうという指向の違いを生んだ。戦後から今日に至るまで、女性は「職業か、家庭か」の二者択一を迫られてきたが、社会的構造が二者択一を迫ると言う側面は厳然としてあるものの、その他方では主体が選択するという側面がある。主体の指向性の違いがいずれから生れるのかはなお定かではないが、少なくとも女性個々人が一人の人間として意思決定することが社会的に許容されるようになった時代のその始まりの時点で、その人たちの意思が向かう先はすでに一つのものではなかったと言うことはできる。さらに、その後の日本の高度経済成長は、それらの指向性の違いを受け入れる余裕を与えた。すなわち、労働力の拡大を求めた先ではTさんのような女性の能力開発があった。また、企業戦士のために家庭を守ったSさんは、教養を高める時間的、経済的余裕を得た。それぞれに選んだ生き方の実現が可能になった。

ここで、注目すべきは日本では戦時下の強烈な体験が家庭内での教養の獲得にも向けられたという事実である。確かに、アメリカ女性の中には戦後間もなく社会人にも門戸を開いた高等教育機関で学び、そこで得た知識、技術を就業に生かして社会での活動に発展させた人もいたが、教養、知識、技術の獲得が広い社会での活用のためではなく、個人的な知的な達成感に留められたのは日本人的特徴であると思われる。

おわりに

本稿では、第二次世界大戦中の日本の女子学徒の工場労働経験と戦後における職業指向へのその影響を探ることを目的としたが、同じように女性の工場労働参加を必要としたアメリカにおける状況も視野に入れ考察した。その結果、国の政策や各国が置かれた戦況状態により労働条件や環境には差があり、労働参加した女性のグループもアメリカは成人女性、日本は未成年の学徒という違いがあるが、いずれの国でも従来家庭内に留まる筈であった女性たちが工場労働の経験から共通して得たのは、自分自身の精神力、能力、体力に関する自信であり、多様な人々との交わりからの視野の広がりであったと言える。

さらに、研究方法としてGluckが採ったライフヒストリー研究では、当事者たちの語りから、アメリカ女性の戦時下での労働の経験とその後の社会での就業への影響などは、大戦前後の女性労働に関する統計に表われるような「大きさ」ではなく、むしろ、女性の心の中、夫との関係や娘たちの自立への期待、そして公民権運動へのサポートなど目に見えない動きのプロセスとして捉える方がより妥当に把握できることが明かにされた。

一方、動員下での労働経験者の生の声の聞き取りを通した本稿では、日本の女子学徒もその辛い、思い出したくないような工場労働のネガティブな体験から戦後の人生を牽引する強い力を得ていたことが明かになった。これは、社会構成主義による解釈だけでは説明がつかない。つまり、「教えられるままに信じた」ことへの反省から自己決定と客観的な状況認識の重要性への気づきがあり、「自らに納得した」上で選び、行動するという強い信念を形成

する力となった。また通常の女学校生活から「奪われたもの」を「取り戻したい」という思いを、「学びたい、何でも学ぶ」という積極的な学習意欲に転換し、戦後に生じた様々な学びの機会を掴み、自己実現する力とした。その過程で、学習意欲を社会での生産活動への従事に向けた人と、自らの教養の獲得や向上に向けた人がいたことも明らかになった。このように、同じ経験を持っても戦後になって学習意欲をどの方向へ向けたかにより行動が異なった。職業労働（生産活動への従事）と教養の獲得・向上という二つの異なった方向に向かった学習意欲の指向性の違いが、今日の日本女性にも「働く」と「働かない」の間の二項対立的な意識を生み出す一因になったと推察される。

なお、女子学徒の「働くこと」に関するこれらの意識がどのように次世代の女性に継承されたのかについては、新たな研究課題としたい。

注

- 1) 男子の中等教育とちがって『学歴』取得による社会的な移動という『手段性』の弱い女子中等教育に人々が期待したのは、(中略)地域社会の『中流』としての階級的な威信の源泉であった。(稲垣 2007 p.19)
- 2) これらの著書のタイトルにRosieが付いている。Rosieについては、注5を参照。
- 3) 半構成法の質問事項：
 1. 学徒動員されたときは何年生でしたか。
 2. どんな仕事をしましたか。(環境や一緒に働いた人のことについても)
 3. 辛かった、怖かった、口惜しかった、楽しかったなどの経験や新しい発見などについて話して下さい。
 4. 動員下での経験との関連も考えながら、戦後の人生について語って下さい。
- 4) 紙数の関係でインタビュー記録は掲載していない。
- 5) 1943年にWestinghouse Corporationが女性労働者の志気を高める目的で使ったポスターのRosieが一般的。この女性が戦時下で生産労働に携った女性の総称としてRosieと名づけられたのは1975年以降。
- 6) Honeyは社会の中間層を対象とする*Saturday Evening Post*と労働者層を対象とする*True Story*の比較研究を行った。
- 7) Ed James作。何でも知っている、知ったかぶりをする父親、理知的で忍耐力のある母親、三人の子どもの中西部中流家庭の日常を描いた1940年代のラジオ番組。1954-1960にテレビでも放映。
- 8) 1979-82に南カルフォルニアの飛行機製造工場で戦時下に従事した200人の女性を対象とした研究。
- 9) 社会人に高等教育機関の門戸を戦後すぐに開いたアメリカと80年代後半まで一般化しなかった日本との差はあるが、これは教育組織に関する研究課題となるので、本稿では事実を述べるに留める。

参考文献

Cohen, Jerome B. 1949. *Japan's Economy in War and Recon-*

- struction*. University of Minnesota Press.
- Coleman, Penny. 1995. *Rosie the Riveter*. Random House Inc.
- Gluck, Sherma, Berger. 1987. *Rosie the Riveter Revisited*. A Meridian Book.
- Holloway, Susan D. 2010. *Women and Family in Contemporary Japan*. Cambridge University Press.
- Honey, Maureen. 1984. *Creating the Rosie the Riveter: Class, Gender and Propaganda during World War II*. The Univ. of Massachusetts Press.
- 堀 サチ子, 1991, 「十五年戦争における女子労働政策と既婚女子労働者」東京歴史科学研究会編『女と戦争』, 昭和出版, pp.133-152。
- 兵庫県婦人問題研究会 (編), 1975, 『足音』No. 1。
- 稲垣恭子, 2007, 『女学校と女学生』, 中央公論新社。
- 厚生労働省, 『平成23年版 働く女性の実情』, www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002ea8h.html (2012年8月28日取得)。
- 毎日新聞社, 1981, 『一億人の昭和史 日本人2 三代の女たち 中 昭和・戦前編』, 四月号, 毎日新聞社。
- Miyake, Yoshiko. 1991. “Doubling Expectations: Motherhood and Women’s Factory Work under State Management in Japan in the 1930s and 1940s” in Gail Lee Bernstein (ed.) *Recreating Japanese Women, 1600-1945*. Univ. of California Press. p.p. 267-290..
- 文部科学省, 『学制百年史』, www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/.../1317552.htm (2012年8月28日取得)。
- 永原和子・米田佐代子, 1986, 『女の昭和史』, 有斐閣。
- 西川祐子, 1982, 「戦争への傾斜と翼賛の婦人」女性史総合研究〈編〉『日本女性史』第5巻 現代, 東京大学出版会, pp. 227-263。
- Plath, David. 1980. *Long Engagement*. Stanford University Press.
- 佐藤千登勢, 2003, 『軍需産業と女性労働』, 彩流社。
- 戦時下勤労働員少女の会, 1996, 『少女たちの勤労働員の記録』。
- Soga, Kuniko. 1980. “Continuity and Discontinuity in Japanese Women’s Attitudes Caused by World War II – Analysis of Women’s Activities in Postwar Period” (Master Thesis) . Dept. of History, the University of Colorado, Boulder, Colorado, USA.
- 谷野せつ, 1991, 「戦時下女子労働の実態 - 元婦人工場監督官補の回想」東京歴史科学研究会 (編)『女と戦争』, 昭和出版, pp.49-58。